

3月1日(日) サムエル記第一25章14～17節

**「一緒に羊を飼っている間は、夜も昼も、彼らは私たちのために防壁となってくれました。」
(16節)**

ナバルの報告を聞いたダビデは、剣を身に帯びた四百人ほどの者を連れてナバルの所へ上って行きました。このことをナバルの妻アビガイルに若者の一人が告げました。「あの人たちは私たちにとても良くしてくれたのです。」と言い、16節では「一緒に羊を飼っている間は、夜も昼も、彼らは私たちのために防壁となってくれました。」と言います。防壁は、外からの攻撃を防ぐものであり、防壁の中にいれば人々は安心することができました。ダビデたちは防壁のようにして自分たちをさまざまな危険から守ってくれたので、自分たちにとってそれがどれほど安心だったかを語っているのです。当時は、羊を略奪しようとする者たちや羊を狙う野獣の襲撃によって羊を飼う者たちは常に危険にさらされ、不安と恐怖の中に置かれていました。そして羊飼いであったダビデは、そのことをよく理解し、ナバルの若者たちを守ろうとしたのでしょう。17節でこの若者は、アビガイルに「今、あなたがどうすればよいか、よく考えてください。」と勧めます。それは「わざわざいざご主人とその一家に及ぶことは、もう、はっきりしてい」るからであり、まさにダビデがナバルを討ちに来ることを確信して、警告を与えているのです。ある説教者が、自分のしたことはすぐに忘れ、他人からされた愛の行為は決して忘れないようにしなさいと言いました。私たちは、人のためには積極的に何かを行います。しかし、人から何かをされることについては、遠慮して断ることが多いものです。しかし、主は自分をあわれんで、恵みとして自分の周りにこれだけの兄弟姉妹方を与えてくださり、その方々が愛をもって自分の必要を満たしてくださり、欠けを補ってくださることにもっと感謝すべきです。それとともに、私たちは主に対してはナバルのような主を恐れない態度を取ってはいないでしょうか。もちろん主は人からの感謝を欲しているわけではありませんが、主への感謝を主は喜ばれます。常に主からの恵みに対して心からの感謝をささげる信仰者でありたいと願います。

3月2日(月) サムエル記第一25章18～31節

「どうか、はしための背きをお赦しください。」(28節)

3節で夫ナバルは頑迷で行状が悪く、25節でも「あのよこしまな者」「彼の名はナバルで、そのとおりの愚か者です」と言われていますが、それとは反対に妻アビガイルは、3節で賢明と言われています。その賢明さをもってアビガイルは若者の言葉を聞くと、すぐにその対応の

ために動き出します。「パン二百個、ぶどう酒の皮袋二つ、料理した羊五匹、炒り麦五セア、干しぶどう百房、干しいちじく二百個」を準備しましたが、これは、六百人ほどの男が十分に食べられる量だと言われています。それらを載せて進んで行きますと、「ダビデとその部下が彼女の方に下って来るのに出会」いました。(20節) 21, 22節には、ダビデがちょうどアビガイルに会う直前のことばが記されています。荒野でダビデがナバルにしたことは全く無駄であった、あの男は善に代えて悪を返したと言います。22節でダビデは、「あの男に属する者のうち小童一人でも残しておくなら、神がこのダビデを幾重にも罰せられるように」と、誓いのことばまで用いてナバルに属する者たちの皆殺しを命じています。それほどナバルに対して怒りを燃やしたということです。

アビガイルはダビデを見ると、急いでろばから降り、ダビデの前でひれ伏します。24節で「ご主人様、あの責めは私にあります」とアビガイルは、夫ナバルの責めを自分で負おうとしています。そして28節で「どうか、はしための背きをお赦してください。」と赦しを願います。自分がここに来たのは「主は、あなたが血を流しに行かれるのを止め、ご自分の手で復讐なされることを止められました。」と言い、自分がこのようにしてダビデに会ったことも主のみこころであると告げます。なぜなら、28節で、主は必ずご主人様のために、確かな家、すなわち王朝を建てると言います。その理由として「ご主人様は神の戦いを戦っているのですから」と言い、それゆえに主がいのちを守られると言います。(29節) そして、そのような者が、ナバルに属する者たちを討って血を流すことで、悪が見いだされてはならない(28節)「理由もなく血を流したり、ご主人様自身で復讐したりされたことが、つまずきとなり、ご主人様の心の妨げとなりませんように」と言います。

今日の箇所から私たちは大切なことを教えられます。まず一つ目ですが、私たちの行動が主のみこころにかなわないことがあります。その時に主は、さまざまな人たちを用いて止められることがあります。その時に私たちは落ち着いて、主の御前にみこころを祈り求めるべきであって、決して主の制止を振り切って強行突破するようなことがあってはなりません。二つ目ですが、私たちは自分が主の御前にナバルのような愚か者であることを認めざるを得ません。主に従わず、感謝もせず、まさに主は私たちの愚かさや罪に対して父なる神は怒りを燃やされることもあるでしょう。そのような時にイエス様が私たちのためにとりなしてくださいませ。まさにイエス様は「あの責めはわたしにあります。」「どうかあの者の罪をお赦してください」とイエス様ご自身がとりなしてくださいませのです。ヨハネの手紙第一2章1節を読み、御父の前でとりなしてくださいませるイエス様に心からの感謝をささげましょう。

3月3日（火）サムエル記第一25章32～39a節

「主がほめたたえられますように。主は、私がナバルの手から受けた恥辱に対する私の訴えを取り上げ、このしもべが悪を行うのを引き止めてくださった。主はナバルの悪の報いをその頭上に返された。」（39節）

ダビデは、アビガイルの言葉を受け入れて、ナバルに対する復讐を思いとどまりました。「あなたは今日、私が人の血を流しに行き、私自身の手で復讐しようとするのをやめさせた。……あなたが急いで私に会いに来なかったなら、きっと、明け方までにナバルには小童が一人も残らなかっただろう」（33～34節）とのことばかりも、自分の衝動に任せて行動するのではなく、主なる神への信仰によって行動すべきことをダビデ自身も教えられたことが分かります。まさにこのことは、これから王となろうとしているダビデにとっては大切な教訓でした。

アビガイルがナバルの所へ戻ると、自分の家で王のような宴会を開いていました。朝になってナバルの酔いがさめたタイミングで、アビガイルがこれらの出来事を告げると、ナバルは気を失って石のようになりました。そして十日ほどたってナバルは死にましたが、聖書は「主はナバルを打たれ」と言い、ナバルの死因は主が打たれたことによることを明らかにしています。そしてナバルの死を聞いたダビデは「主がほめたたえられますように」と主をほめたたえながら三つのことを明らかにしています。まず一つが、主はダビデの裁判官のように「ナバルから受けた恥辱に対する訴えを取り上げてくださった」二つ目が「ダビデが悪を行うのを引き止めてくださった」三つ目が「主はナバルの悪の報いをその頭上に返された」ということです。

私たちも、衝動的に行動して失敗することがあります。その中であって主は私たちの行動を止めることで、罪や過ちから守られることがあります。そして、すべてを主にゆだねる時に、主はすべてを最善に導いてくださるのです。そして、主の導きの一つ一つが私たちの教訓となり、時には失敗からも大切なことを教えられます。私たちの信仰の歩みが、主を通しての学び舎なのです。

3月4日（水）サムエル記第一25章39b～44節

「さあ。このはしためは、ご主人様のしもべたちの足を洗う女奴隷となりましょう。」（41節）

夫ナバルが亡くなり、独り身となったアビガイルにダビデは人を遣わして自分の妻になるよう申し入れました。彼女はすぐにダビデのしもべたちにも敬意を払って地にひれ伏して礼をし、「さあ。このはしためは、ご主人様のしもべたちの足を洗う女奴隷となりましょう。」と言いま

す。アビガイルは、ダビデの前で自らをはしためと呼んでいましたが、(24, 25, 27, 28、31節) 41節にもアビガイルの謙遜さが現れています。3節でアビガイルは賢明であると紹介されていますが、まことの賢明さは、まさにこのような謙遜にこそ現れることをあらためて教えられます。

14章50節で「サウルの妻の名はアヒノアムで」とありますが、このサウルの妻のアヒノアムと43節のイズレエルの出であるダビデの妻のアヒノアムとは同名の別人であると考えべきです。ですから、あえて出身地をここには入れてあるのでしょう。そして、ダビデの不在をよいことに、サウルはダビデの妻であった娘ミカルを別の男性のもとに嫁がせました。

先ほども記しましたが、私たちは主の目には賢明な者と映っているでしょうか。その賢明さは、主のみこころに従う信仰によって行動し、そして謙遜に人々に仕えること、特に主のみこころであれば奴隷以下の働きをするところにも現れています。アビガイルの賢明さは、箴言31章10～31節にも似ていますが、特に、「主を恐れる女はほめたたえられる」とありますように、主を恐れることで人々からたたえられ、主もその人をたたえるような者とされることを願います。

3月5日(木) サムエル記第一26章1～12節

「殺してはならない。主に油注がれた方に手を下して、だれが罰を免れるだろうか。」(9節)

23章19節に続いてジフ人たちが、サウルにダビデの居場所を告げます。それを聞いたサウルは、三千人のイスラエルの精鋭とともにジフの荒野へと下って行きました。ダビデがエン・ゲディの荒野でサウルを生かした時に、サウルは泣いて自分のしようとしたことを悔い、自分に良いことをしてくれたダビデは自分よりも正しいと言いましたが、(24章1～22節参照) 再び兵を率いてダビデを捜そうとする姿に、その時の涙やダビデにかけた言葉は何だったのだろうかと思ってしまう。サウルは、ダビデが隠れているとの報告を受けたハギラの丘で、道の傍らに陣を敷きました。ダビデもサウルが自分を追って荒野に来たのを見て、偵察を送り、サウルが確かに来たことを知りました。そして大胆にもダビデはサウルが陣を敷いている場所までやって来て、サウルと軍の長でおじのネルの子アブネル(14章50節)が寝ている場所を見つけました。6節で、「だれか、私と一緒に陣営のサウルのところへ下って行く者はいないか」と言うと、ダビデの甥のアビシャイ(歴代誌第一2章16節参照)が、「私が一緒に下ってまいります。」と答えます。ダビデとアビシャイは夜、兵たちのところへ来ました。サウルが横になって寝ていて、アブネルも兵たちも、その周りに眠っていました。「神は今日、あなたの敵

をあなたの手に渡されました」と言い、これはまさに神が自分たちに与えたサウルを殺す絶好の機会だと思ったのでしょうか。そして「どうか私に、槍で一気に彼を地面に突き刺させてください。二度することはしません」つまり、しくじることなく自分が一気にサウルを仕留めることができると言うのです。しかし、ダビデは24章6～7節と同様に、サウルに手を下してはならないと再度命じます。それは、彼が主に油注がれた者だからです。そして10節で「主は必ず彼を打たれる」と、自分が手を下さなくとも主がサウルに報いられることを信じて、主のさばきにサウルの命をゆだねました。そしてダビデは自分たちがサウルの寝ているところに来た証しとして槍と水差しを持っていきました。

サウルは、ダビデを捜して捕えることにのみ心を奪われ、ダビデがいるとの報告を受けた場所にすぐに向かいました。サウルは主を恐れず、ただ自分の考えのままに行動していました。一方ダビデは甥のアビシャイの言葉にも決して心を揺るがすことなく、また苦しみを自分たちの手で終わらせる機会を勝手に主が与えてくださったとは解釈せず、主が油注がれた者であるとの事実を尊重し、主を恐れるがゆえにサウルにも敬意を払いつつ、主の御手にサウルをゆだねました。ここにダビデの信仰が現れています。私たちは感情のままに行動したり、祈らずして、これが主のみこころと勝手に考えてしまうことはないでしょうか。むしろダビデのように主を恐れつつ、主のみこころに従って行動する者でありたいと思わされます。

3月6日（金）サムエル記第一26章13～20節

「わが君、王様。どうか今、しもべのことばを聞いてください。もし私に敵対するようあなたに誘いかけたのが主であれば、主がささげ物を受け入れられますように。しかし、それが人によるのであれば、その人たちが主の前でのろわれますように。彼らは今日、私を追い払って、主のゆずりの地にあずからせず、『行って、ほかの神々に仕えよ。』と言っているからです。」(19節)

ダビデは向こう側へ渡って行き、遠く離れた山の頂上に立ちました。「彼らの間には大きな隔たりがあった。」と説明されていますように、大きな声で叫べば声が聞こえるくらいで、もちろん姿が確認できないくらいは離れていたことでしょう。14節でダビデは軍の長アブネルに呼びかけて、「アブネル、返事をしないのか」と言いますと、アブネルは「王を呼びつけるおまえはだれだ」と答えます。そのアブネルにダビデは、兵の一人が主君を殺しに入り込んだことに気がつかなかったのは、王の護衛失格であることを伝えます。王の枕もとにあった槍と水差しがなくなっていることを証拠として、王を護衛できなかった兵たちに「おまえたちは死に値する」と言います。そしてダビデの声だと気がついたサウルは、直接ダビデに呼びかけます。(1

7節) 18節からダビデは24章8節以下と同様に、再びサウルが自分を捕えようと捜し回ることに抗議するとともに自分の無実を訴えます。その中であって19節でサウルに誘いかけた二つの可能性について語ります。まず、ダビデに敵対するよう誘いかけたのが主であれば、ダビデは喜んで主へのささげ物になると言います。ところが、誘いかけたのが人の場合であれば、その人たちが主の前でのろわれますようにと言います。なぜなら、無実のダビデが、まるでサウル王の敵であるかのように思いこませ、イスラエルを去らせようとするに等しいからです。それは、まことの神を礼拝させないようにし、ほかの神々に仕えよと言うに等しいからです。ダビデは、「私の血が主の御顔から離れた地、つまり異邦人の地に流されることがありませんように」と言い、24章14節では、ダビデは自分を死んだ犬、一匹の蚤と言っていますが、ここではしゃこ、一匹の蚤に自分を例えます。

私たちの行動の原則はどこにあるのでしょうか。主ですか。人ですか。自分自身の考えや願いですか。願わくば、自分は主に従って行動していると確信をもって言える者でありたいと願います。そのように信仰の確信に満ちた歩みが日々なされ、それが私たちの生涯の証しとなりまうように。

3月7日(土) サムエル記第一26章21~25節

「今日、私があなたのいのちを大切にしたように、主は私のいのちを大切に、すべての苦難から私を救い出してくださいませ。」(24節)

21節で「私が間違っていた。」「本当に私は愚かなことをして、大変な間違いを犯した」と、間違っていたと二度繰り返し、「わが子ダビデよ、帰って来なさい」と呼びかけます。実際に、これがサウルの本心だったかどうかは分かりませんが、すでにダビデとサウルの関係は修復不可能な状況にありました。ですから、ダビデはこの要求を無視して、自分の槍を若者の一人に取りに来させるように言います。そして主が今日サウルを自分の手に渡されたけれども、主に油注がれた方であるがゆえに、手を下さなかったと言います。(23節) このことについてダビデは、「主は一人にひとりに、その人の正しさと真実に応じて報いてくださいます。と言います。つまり、主は人の目に隠れたこともすべてご存じであり、主の御前における正しさと真実に応じて報いてくださるお方だと信じていました。ここにダビデの主への恐れと謙遜さを見ることが出来ます。もし私たちも主が私たち一人ひとりの正しさと真実に応じて報いてくださると信じるなら、私たちの生き方も変わることでしょう。

さらに「今日、私があなたのいのちを大切にしたように、主は私のいのちを大切に、すべ

ての苦難から私を救い出してください。」(24節)と言いました。ダビデは、主が油注がれた方であるがゆえにサウルに手を下すことをしませんでした。それと同様に、自分も主によって油注がれた者である以上は、主があらゆる危険やわざわいから自分のいのちを守ってくださると信じていたのです。主は私たちを滅びから救い出してくださり、永遠のいのちをもって生きるようにしてくださいました。主はその私たちのいのちを危険やわざわいから常に守ってくださると信じて、どんな中でも信仰により平安に歩みたいと思わされます。